

# 平成 16・17 年度大学院派遣研修の概要

2006. 3. 6

小松市立串小学校 多保田好浩

## 【研究題目】

### 「道徳」副読本からみた道徳教育

## 【研究の概要】

### (1) 研究の目的

現在の道徳教育は、青少年犯罪の凶悪化、低年齢化というマスコミの論調に呼応し、子どもたちの「モラルの喪失」「心の危機」を叫びながら「心の教育」をすすめるものである。本研究の目的は、このような現在の道徳教育が子どもたちにとって本当に意義あるものになっているかどうかを考察することである。そして仮にそうになっていないのならば、子どもたちにとって意義ある道徳教育とはどういうものなのかについて提言することである。この目的をなすために、「道徳」副読本の調査・分析を試みた。

### (2) 研究の方法

2000年（平成12年）5月に文部省から発表された「道徳教育推進状況調査報告書」によれば、道徳の時間の指導で使用された教材について特に使用頻度の高いものとして「民間の教材会社で開発・刊行した読み物資料」としたものが60.86%（小学校）と高い回答率を示した。次いで高率だったのが「テレビ放送」で12.95%（小学校）であることをみると「民間の教材会社で開発・刊行した読み物資料」の使用率の高さが際立つ。つまり「道徳の時間」において使用される教材としては「民間の教材会社で開発・刊行した読み物資料」——「副読本」の占める割合が圧倒的に大きいのである。このように、道徳教育において子どもたちに多大な影響を与えていると考えられる副読本が、どのような思想やスタンスで編集されているのかを分析することによって現在の学校教育における（「道徳の時間」における）道徳教育のあり方、道徳観が見えてくるのではないかと考えた。

副読本の調査の観点としては、大別して文部省資料（文部省から発行された「読み物資料集」に所収されている資料）の副読本への影響度と、副読本自体の道徳教育に対する思想やスタンスの2点である。

文部省資料の副読本への影響度については、副読本に採用されている文部省資料の資料名、資料数、全体資料数に対する割合等を調査した。さらに、採用されている資料の内容についても分析してみた。

副読本自体の道徳教育に対する思想やスタンスを探る切り口としては、読み物資料の表現形式、及び内容項目の軽重度を調査した。どのような手段を用いて、どのような内容項目を重視しているかを探るためである。また、これまでの副読本には見られないような——従来の「読み物資料」とは違う——新しいタイプの資料が使われてきているので、その

ような資料についても分析してみた。

調査・分析した副読本は民間の教科書会社 10 社（大阪書籍，日本文教出版，学校図書，教育出版，日本標準，光文書院，光村図書出版，東京書籍，文溪堂，学習研究社）から出版されている小学校用副読本全 60 冊（6 冊×10 社），資料数は全 2,162 点である。

（3）調査結果

- ① 副読本に採用されている資料数の約 16%が文部省発行の「読み物資料集」からの借用である（表 1 参照）。

表1)出典別の資料の割合

	A:文部省	B:編集委員会	C:編集委員会選考	D:石川県版
1, 2 年(全 715 点)	15.9	55.9	25.2	2.9
3, 4 年(全 725 点)	15.3	41.9	39.9	2.9
5, 6 年(全 722 点)	16.1	43.2	38.0	2.8
総数 2,162 点	15.8	46.9	34.4	2.9

- ② 複数の出版社で採用されている同一の資料（以下「重複資料」と表記）は計 93 点あったが，うち 72 点（約 77%）が文部省資料である。重複資料 93 点のうち，出版社の半数（5 社）以上で重複採用されている資料は 24 点あったが，うち 22 点（約 92%）が文部省資料である。
- ③ 副読本には計 136 人の人物が採り上げられており，うち 37 人が複数の出版社で採り上げられている。複数社で採用された 37 人のうち，17 人（約 46%）は文部省資料にも採用されている。また，全 136 人の人物でも，うち 43 人（約 32%）が文部省資料に採り上げられた人物である
- ④ 副読本資料の約 60%が物語や小説等，創作された「フィクション資料」で，他の表現形式の割合よりも圧倒的に高い（表 2 参照）。

表2)表現形式別による資料の割合

表現形式	1, 2 年	3, 4 年	5, 6 年	全体
①物語・小説	60.8	69.4	50.3	60.2
②詩	4.5	1.7	1.4	2.5
③民話・昔話	1.5	1.8	1.2	1.5
④エピソード	2.1	9.0	24.5	11.9
⑤論説文・解説文	0.8	1.0	3.7	1.9
⑥エッセー・回想録	0.4	1.4	6.9	2.9
⑦作文・手紙	5.9	8.6	5.1	6.5
⑧新聞記事	0.0	0.3	0.4	0.2
⑨写真・漫画	20.6	3.6	3.2	9.1
⑩その他	3.4	3.4	3.2	3.3

- ⑤ 内容項目別では，「節度・節制，思慮・反省」「生命尊重」「思いやり・親切」をねらいと

する資料が多く採り上げられている（表3参照）。

表3) 資料数の割合が多かった内容項目上位5

	1, 2年	3, 4年	5, 6年
1	<b>節度・節制, 自立</b>	<b>節度・節制, 自立</b>	<b>生命尊重</b>
2	<b>生命尊重</b>	信頼・友情	不撓不屈, 希望・勇気
3	<b>思いやり・親切</b>	公德心, 規則の尊重	国際理解
4	公德心, 規則の尊重	<b>生命尊重</b>	<b>思慮・反省, 節度・節制</b>
5	自然愛・動植物愛護	<b>思いやり・親切</b>	<b>思いやり・親切</b>

\* **太字斜体**は全学年でランクインしている内容項目

⑥ 道徳的価値を内面化するために心理学の技法を用いている資料が見られる。

i. ロールプレイや、エンカウンター等の技法を採り入れた資料（表4参照）。

表4) 心理学の技法を採り入れた資料数とその割合(各学年別)

	心理学的資料の数	全資料に対する割合
1, 2年	18	2.5%
3, 4年	22	3.0%
5, 6年	17	2.4%

ii. ポスターの手法を用いて効果をねらったと思われる「ポスター的資料」（表5参照）。

表5) 「ポスター的資料」の数とその割合(各学年別)

	ポスター的資料の数	全資料に対する割合
1, 2年	84	11.7%
3, 4年	33	4.6%
5, 6年	17	2.4%

上記のような資料は、これまでの副読本にはあまり見られないような「ニュータイプ」のものである。

#### (4) 分析

- ①副読本は検定教科書ではないが、文部省資料の影響を多大に受けている。
- ②各社で採用されている文部省資料には子どもが一読しただけで、ねらいに対する見当がついてしまうもの（つまり教師が期待する“解答”を察知してしまうもの）や、現実感の乏しいものが少なくない。
- ③副読本の思想は事実に基づいて子どもたちに道徳的価値を内面化させようというよりも、フィクションの世界で内面化させようとするものといえる。
- ④道徳に心理学の技法を用いることは、子どもたちに内向きの「心の世界」を広げようとするものといえる。

#### (5) 考察

以上のような調査・分析を行った結論として、現行の副読本に見る道徳教育のスタンス、思想は大別して2点あるといえる。一つは「徳目主義」\*1であり、もう一つは「道徳の心

理主義化」である。

子どもが一読しただけで、ねらいに対する見当がついてしまうような資料を用いて、徳目を強化しようとする授業を行おうとすると「目標優先主義」の授業となり、教師が勝手に（しかも大した根拠もなく）作り上げた「ねらい」（徳目）に強引に引っぱっていかうとする授業となってしまう。このような授業がくり返されると、子どもたちは資料を読んだだけで、その「ねらい」（徳目）を察知し、それに反するような意見を言わなく（言えなく）なってしまう。自分の経験や認識に裏打ちされた考えでなく、その「ねらい」に合致するような意見しか表明しなくなる（できなくなる）のである。先生の思惑を見抜き、先生を喜ばせることが子どもの仕事になり、先生から教わることを素直に受け入れ、その考えに「同調」することを覚える。だからいつまでたっても道徳心が自分のものにならない。他人のことばで善悪を語れるが、具体的なかたちとなって現れない。真の自己表明をせず、偽善の自己表明をする。道徳的なことばが一人歩きをするのである。

一方、道徳に心理学的技法を用いることによって（道徳を心理主義化することによって）、自発的・能動的な従属性が子どもたちに浸透していく。そして、人の関係や社会の状況よりは自分の内面に関心が向き、子どもたちに孤立的・内面的視座を作っていく。それはまた、個々の（状況的、社会的）問題を心のあり方の問題に矮小化する。同時に、自己を分割し、自立心なき「同調」を生み出していく。

このように見てみると、副読本の「道徳」が推進するような思想では、「モラルの喪失」といわれるような現代の子ども問題を解決することはできないであろう。

では、子どもたちにとって意義ある道徳教育とはいかなるものであろうか。それは「他者関係の再構築」にあると考える。「モラルの喪失」といわれるような現代の若者たちのふるまいは、他者の存在を無視した悪意の結果などではなく、他者の存在に無関心なる結果、つまり「風景化」「他者の無化」の結果だといえよう。彼らに欠けているのは、モラルについての意欲や態度ではなく、意味ある人間としての他者の認識なのである。モラルが成立するためには、意味ある人間として他者が認識されていなければならない。しかし、若者たちにとって、そのように感受される他者の範囲は、現代社会においてはきわめて狭くなっているのである。要するに、他者との関係性の崩壊、あるいは変調が現在の子どもの道徳性の発達を阻害しているのだとしたら、その関係性を再構築する必要があるのである。学級、あるいは学校という集団の中に豊潤な人間関係を再構築していくこと。それが子どもたちを真に道徳的たらしめる第一歩だと考える。

---

\*1 宇佐美寛によれば「徳目主義」とは、「徳目というたぐいの言葉と価値の経験とを区別せず、経験（直接経験であろうと間接経験であろうと）の中に、言語で名ざしできるような形で価値が存在すると考える基本構造の思想」のことをいう。宇佐美寛『「道徳」授業をどうするか』明治図書、1984年、80頁。